

# 開会あいさつ

リチャード・ゴンブリッチ

皆さま、本日はシンポジウムの口火を切る榮譽を与えてくださり、大変光栄に存じます。本日は川田所長はじめ東洋哲学研究所の研究員の方々が東京からお越しくださいました。

私が所長を務めるオックスフォード仏教学研究所（OCCBS）と貴研究所が協定を結んだことは、私の誇りであり、大変にうれしいことであります。これが実現したのは、川田所長が研究員の方々とともに、ここを訪問されたことが発端です。この協定により、貴研究所

とOCCBSは、仏教の研究において学術提携をすることを約束しました。それだけではありません。貴研究所は機関誌に私たちの論文の幾つかを掲載してくださっており、その原稿料の多くは、OCCBSの図書館の運営費として使わせていただいています。私どものオフィスにあるこの図書館には、仏教関係の書籍——一次資料もあれば二次資料もあります——を所蔵しているわけですが、登録すればどなたでも閲覧、借用できるようになっております。

さて、皆さまは今日の午後と明朝のシンポジウムのスケジュールは御存じでしょうか、これより私は自身の学術発表をさせていただきます。

ちょうど二年前（二〇一四年三月二十二日）、私と、同僚のスレン・ラーガヴァン研究員は、東京で開催された東洋哲学研究所の（第二十九回）学術大会に招待され、人類のより良き未来のために仏教がいかなる可能性をもっているかについて発表いたしました（『東洋学術研究』第五三巻第二号に掲載）。

その後、同研究所から、引き続き同じテーマで二回目のシンポジウムを行いたいとの希望があったわけですが。このテーマは、二度のシンポジウムでは到底カバーできない大きなテーマですし、本日私に与えられた時間は短く、新たな探求についてお話しする時間がありません。そこで、この場をお借りして、東京でお話しした内容——それもほんのわずかな論及にすぎませんでしたが——のうち何点かについて少し広げてお話ししたいと思います。

### 人類への最大の脅威は「戦争」と「暴力」

これまで、力の拡散は、核の拡散につながってきました。そして、この恐るべき兵器は、その使用を容易には自制できそうにない指導者たちの手に渡ってきました。例えば、力の均衡といった合理的判断が、北朝鮮の核兵器使用を阻止できるかどうかは未知数です。一方、私たちは、シリア内戦で化学兵器が使用されたり、シリア政府が（反政府勢力支配地域の）学校や病院を爆撃するのを目撃してきました。この地域にしろうじて影響力を保持しているロシアとアメリカだけが、シリアの毒ガス危機を収束させられたわけですが、最終的な解決には至っていません。その間にも、イエメンでは戦争犯罪が繰り返されました。実際、状況は悪化の一途をたどっており、十分に想像できることですが、こうした戦争犯罪が連日起きていと言われています。より多くの国々や、小さな戦闘勢力さえもが、そのような恐ろしい武器を所有すれば、前途は不安だらけということになります。

もちろん、飢餓や病気による度重なる脅威があり、生態系の危機も目を追うごとに差し迫った問題になりつつあります。それにもかかわらず、全人類にとつて最大の脅威は、やはり戦争と暴力からもたらされ続けていると私は信じます。現在では二百万人以上の難民がアジアやアフリカからヨーロッパに殺到しています。彼らは飢えや病気に苦しんでいます。現在、その問題を緩和させるための程度の方が、十分ではないにしろ、私たちにはあります。しかしながら、この問題の根本原因は、ひとえに暴力——つまり彼らの生命を脅かす恐怖なのです。これは、アフリカからの難民には完全には当てはまらないことかもしれませんが、ほとんど全てのアジア難民は戦争や残忍な紛争から逃れてきたのです。

「目には目を」は受け入れられない

仏教はこうした問題に対して、いかなる役割を担うのでしょうか？ 東京でもお話ししました通り、私たちは、業（カルマ）という基本的な教え、つまり自己責任の教えに立ち戻らなければなりません。ブッダが説

いたように、すべての思考・言葉・行いは、その背後にある意思によって、肯定的あるいは否定的な道徳上の価値を生み出します。これは、行為の結果が重要ではないということではありません。仏教は、過失という観念を受け入れることに関して、現代の法律と何ら変わりありません。しかし、道徳についての不変の基本的基準は意思です。道徳的であることも不道徳であることも、各人の心理的な特性です。その特性こそが、各人の人格を形成する中心的構成要素なのです。人はほかならぬ自分自身の業の相続者であり、他の何ものかの業の相続者ではないのです！

業は個人の責任の問題です。ですから、ある家族の一員として生まれるとか、自発的に加入したわけではない社会集団の一員であるといったこと自体は、いかなる業の結果をも必然的にもたらすわけではありません。他方、何か大きな力といったものが——神的存在に由来するものであれ、人間に由来するものであれ——、ある人の業を定めることもありえません。自身の意思について、私は、神や父親や教師や政治家を

責めることはできません。実際のところ、それを誰のせいにもできないのです。

こうした事実が意味するものとは何でしょうか？

地球上には、『旧約聖書』で「目には目を、齒には齒を」と呼ばれている復讐の原則を信じている社会が、いまだに相当数あります。つまり、あなたが私を侮辱すれば、私にはあなたが侮辱する権利があります。あなたのせいで私が傷つけば、私にはあなたが傷つける権利があるのです。しかしながら、『ダンマパダ』では、憎しみは憎しみによって止むことはないと教えられています。ですから、「目には目を」の原則を私たちが受け入れられないのは、ごく当然のことのように思えます。

敵を「憎むな」、ただし「愛する」必要はない

しかし、ここで、ちょっと考えてみてください。もしも、あなたが私の母を侮辱したら、私にはあなたの母親を侮辱する権利が——というより、義務さえもが——ないでしょうか？ あるいは、母親ではなく、お

姉さんや妹さん、あるいは奥さんが侮辱された場合はどうでしょうか？ しかし、そうすると、どうして侮辱だけの問題と言えるでしょうか？ 侮辱に対して、

この原則を適用するならば、それは他のもっと深刻なかたちの危害にも適用してはいけないのでしょうか？ もし、あなたのお祖父さんが私の父を殺したとしたら、私があるの父上や、ことによると、あなた自身を殺すことは正当な行為ではないのでしょうか？ こうした領域に踏み込んだ時に見えてくるのは、家族の名誉とか家族や他の団体への忠誠といった観念が、どれほど道徳的に問題をはらんでいるかということです。

ある人に対して重大な悪事が為された時、犠牲者にとって、また犠牲者に近い人々にとって、それを赦すことは容易なことではありません。イエスは信徒たちに、彼らに危害を加える人々を赦すだけではなく、むしろ愛しなさいと強く説いていますし、それは全てのキリスト者が従うように定められた規範です。私の考えでは、これは無理な教えであり、それゆえ、現実的ではありません。注意していただきたいのは、『ダン

『マバダ』の詩偈で勧めているのは、あなたを憎む者を憎まないようにということです。彼らを愛するところまで行かねばならないとは言っていないのです。私が思うに、私たちが道徳的英雄のようなまねをやめて、ただ単純に、過去にいつまでもとらわれることなく「憎むのをやめる」だけで、人類の生存そのものを脅かすほどに蔓延した膨大な量の暴力や戦争は消え去っていくことでしょうか。

とはいえ、私たちは問題の根源に到達できません。そもそもそれらがどのように生じたかを問う必要があるので、悪くはないでしょうか？ この問いは、発するものも悪くはないでしようか？ この問いは、発するものも悪くはないでしようか？ この問いは、発するものも悪くはないでしようか？ この問いは、発するものも悪くはないでしようか？

被害妄想による「負のスパイラル」

私が思うに、すべての原因は「パラノイア（偏執／被害妄想）」という一語でまとめられます。

パラノイアとは、要するに何でしょうか？ それは、

「他人が自分を傷つけようとしている」と真剣に信じている状態です。神経科の病院はこうした悲劇的な症状に苦しむ人たちであふれています。悲劇的——もちろん、そうです。彼らは恐怖と惨めさにさいなまれているのですから。そして、私たちが取り上げている問題に最も関係するのは、彼らが「攻撃的になりやすい」ということです。彼らは他者を敵と見ているので、常に怒りをもっていきます。ですから、自分から相手を攻撃することで、他者からの予期される攻撃に先手を打とうとするのです。

これは「負のスパイラル」を誘発します。パラノイアの人から「悪意をもって」と疑われた人は、当然、そんな疑いを嫌います。その嫌悪感、たちまち敵意に変わっていきます。この敵意が、パラノイアの人に「自分の疑念は間違いない」と思わせて、さらに攻撃性を高めてしまうのです。その結果、相手を侮辱したり、「敵」とみなして暴力をふるうことさえあるかもしれません。すると相手も侮辱し返したり、攻撃し返すことになりがちです。こうして、関係性は急速に悪化を重

ね、ついには、取り返しのない傷を負わないよう病院のスタッフなどの第三者が間に立つ必要性が出てくるところまで行くかもしれません。

これを、明白に二分されたグループをもつ社会に当てはめてみましょう。たとえば、プロテスタントとカトリック、シンハラ人とタミル人、セルビア人とクロアチア人、シーア派とスンナ派などです。こうしたグループは、何世紀もの間、互いに何とか仲良くやってきていて、互いを受け入れてきたとしましょう。ところが、ある日、ニュースが届きます。単なる噂にすぎないのかもしれませんが、どこかで、たぶん遠く離れた場所で、グループAがグループBを攻撃し始めたというのです。次の日、グループBの何人かが仕事で、グループAの優勢な近隣地域に行きました。彼らは「噂を聞いていたため」恐怖心と不信感を抱いていたので、グループAの人たちとの取り引きは、よそよそしく、礼を失したものになり、急いで逃げ出そうという気配でした。これでは、グループAの人々は互いの間の空気が変わったことに対して、まず間違いなく不機嫌な

対応をするでしょう。ぶつきらぼうになっていき、さらには嫌悪感をむき出しにするかもしれません。その不仲はすぐに拡大し、エスカレートして、深刻な侮辱や暴力へと向かっていくでしょう。これ以上の説明は不要でしょう。

パライオアの反対は信頼です。もう一度申し上げますが、私は、人々に「隣人を完全に信頼しなさい」というのは、少し無理があるように思います。しかし、少なくとも、「とりあえず信じてみよう」という心構えは、いつももっているべきであろうと思います。

必要なことは「敵を愛せるようになる」ことではなく、ただ「敵を憎むのをやめる」ことです。もし仏教が、人々に他人の過ちを正そうという執着を捨てさせ、その代わりに、自分自身の精神と行動を浄化することだけに集中するよう説得できるならば、仏教には人類を救う手助けをする可能性があるといえましょう。

(Richard Gombrich)

オックスフォード仏教学研究所創立者・所長